春季大会発表要旨

特集
震災後にうたうこと
――日本詩歌の可能性／不可能性

【特集の趣旨】

運営委員会

東日本大震災から四年が経過し、この経験を直接的あるいは客観的なそれとして物語り、批評するものを漸く多く目にすることが出来るようになってきた。しかし、先の「漸く」という語彙が象徴するこの「四年」という長さを我々はどう捉えればいいのだろうか。

むろん、文壇や批評の反応が決して遅いというわけではなかった。だが、詩歌の領域における反応はもっと敏感かつ迅速であった。現場から発信された和合亮一のTwitterによる詩は、同時中継的に大変な話題となり、後に詩集として刊行されて、それを作品と見做すかどうかについての大きな議論を呼んだ。『現代詩手帖』はわずか二ヶ月後には精力的な震災特集を組んでいる。

さらに俳壇、歌壇においても、各地の雑誌で震災の特集が組まれ、その思想、表現、型式をめぐって多くの議論を引き起こした。テレビやインターネットの情報だけで書かれているといった長谷川櫂の「震災歌集」「震災句集」をめぐる議論などはその典型である。

一方、仙台在住の歌人・佐藤通雅は、震災後急速に多作となり、歌集『昔話（むがすこ）』でその詩境を深め、人々の震災に関わる歌を編んだ『また巡り来る花の季節は　震災を詠む』を刊行した。

和合の活動が象徴的なように、ネットや小規模な同人誌などとより強く結びついた現在の韻文創作の現場では、散文とは違った現場への寄り添い方が新たに現出し、あらためて創作者の「当事者性」をめぐる議論に注目が集まった。また、俵万智の様にTwitterを通じて発信された震災後の実作者の振る舞い自体が、歌とともに話題になったケースもある。

震災後に実際に東北各地に足を運んで、街や人々と触れ合い、その感覚を歌おうとした歌人や詩人も少なくない。主観・客観性、主体性や当事者性、表現形式の諸問題など、そこには現代詩歌における主要な問題が表出していると言えるだろう。

本特集は、東日本大震災を通して現れてきたこうした韻文の可能性／不可能性を総合的に検討してみようとするものである。

体験と有季定型

青木亮人

全国に多々存在する結社俳句誌では、二〇一一年六月号あたりから震災関連の句が発表され始める。それは直接の被害がさほどなかった各地の人々が「復興」の祈念を詠む場合が少なくなかった。

その彼らを有力な購読者として抱える総合俳句雑誌では著名俳人も「追悼・復興」を込めた句を続々と発表する。この流れを象徴するのが長谷川櫂と高野ムツオであろう。長谷川は『震災歌集』『震災句集』を上梓して賛否両論を巻き起こし、多くの市井の俳人は彼の営為を好意的に捉えたが、「燎原の野火かとみれば気仙沼」等を「震災詠」として衒いなく発表する俳句観を批判した俳人も多い。一方、宮城県在住の高野ムツオは「陽炎より手が出て握り飯つかむ」等を詠み、句集『萬の翅』で「俳壇」最高の蛇笏賞等を受賞した。「俳壇」は高野に蛇笏賞を与えることで〝俳句は震災と向き合い、傑作を詠みえた〟ことをアピールしたのである。

ところで、総合俳句誌は〝俳句は震災を詠みうるか〟等の特集を組み、〝三・一一を忘れてはいけない〟等を強調し続けた。しかし、長谷川や高野に象徴されるように、季語を有しつつ五七五の定型が「枷」となりうる俳句が震災を「表現」することに対する自覚や問題意識、また歴史観等はやや希薄であり、この点は詩や短歌――特に「短歌研究」など――と異なるかもしれない。

一方、これら「俳壇」動向と異なるところで、ある種の俳人が震災に興味深い反応を見せた。茨城県在住の関悦史は家が半壊し、その様子をツイッターで知った京都在住の御中虫は長谷川櫂に対抗して『関揺れる』なる震災句集を刊行した。また、鴇田智哉、四ッ谷龍らはいわき市に赴いて瓦礫撤去等に従事し、索漠とした荒廃の様子を句に詠んでいる。本発表では、市井の俳人や総合俳句誌等に象徴される「俳壇」動向と、関や鴇田ら俳人の句との偏差を浮き彫りにしつつ、詩や短歌といかに共通し、何が異なるかを明らかにしていきたい。

〈記録する私〉の問題

阿木津英

大衆化した近代以後の短歌においては、ひとたび事が起きると、直接体験した無数の無名者の口から歌が放たれる。同時にマス・メディアを介在させての歌も登場して、新聞歌壇から結社誌、短歌総合誌にいたるまで、関連歌一色になってしまう。

近年では湾岸戦争以来、オウム真理教事件、阪神大震災、九・一一など、たびたび一過性の興奮が繰り返されてきた。

しかし、このたびの東日本大震災と引き続く福島第一原発事故は、科学文明の行き着く果て、人類の邪悪といってもいいような大テーマを露呈し、わたしたちに否応なく突きつけてきた。長期にわたって遺伝子を傷つける放射性物質、軍産複合体主導による経済効率最優先主義等等、ごく小さな詩型である短歌といえども、大前提としてこういう現実をつねに意識しておきたいと思う。

さて、三・一一以後、おびただしい短歌が

作られ、その反省もなされつつある。「フクシマの沈黙の闇に届く歌をもとめて――ドキュメンタリー化する短歌と共苦の衝動から生まれる想像力と」（所収『〈ケアの思想〉の錨を』ナカニシヤ出版、二〇一四）において、わたしは二年間の短歌と歌壇の言説をおおよそ通覧した。浮かび上がってきたのは、「二十世紀短歌」末流時代としての現代の歌の問題であった。

ことに非当事者のメディアを介した歌に対しては、修辞如何が関心の中心となる技巧至上主義ともいうべき傾向があること。また、当事者の歌も非当事者の歌も、短歌がドキュメンタリー化の傾向にあること。短歌が〈記録する私〉の歌となるその対極に、仮想空間でのキャラクター設定の歌があるが、そのいずれも他者への想像力を閉め出すだろう。

アウシュビッツでも広島・長崎でも、もっとも深刻な当事者は語れなかった。沈黙の果てにブラックホールに吸い込まれざるを得ないような魂があることへの想像力を、なによりも文学は忘れてはなるまい。

震災後にうたうこと
――詩と「うた」をめぐって

佐々木　幹郎

今回の大会のテーマは「震災後にうたうこと」だが、わたしにとって東日本大震災がもたらした問題で大きいのは、むしろ震災の最中に被災者が「うた」をうたう、うたわざるを得なかった、という事実についてである。

東日本大震災後の一年間、わたしは津軽三味線の演奏者である二代目高橋竹山と一緒に被災地を回り、仮設住宅の集会所などで津軽三味線の演奏ライブを開き、また詩の朗読を行なった。その後で被災者からの被災体験談を聞かせてもらった。後にそれは、東北各地に残る民謡の調査につながった。津波に襲われた三陸海岸の東北民謡は、海をほめたたえる漁師たちの歌が多い。津波に痛めつけられた後であるにも関わらず、被災者たちは海をたたえる民謡を求めて、手拍子を打って唱和した。いまもうたい継がれている民謡の歌詞は、大漁を祝う唄がそうであるように、「予祝」の唄である。大漁を唱えることによって、まだ大漁にはなっていないが、やがてやってくる大漁を呼び込もうする。そのことで活力を生む。これが声のマジカルパワーというものだろう。しかし同じ頃、東京を中心とする首都圏、あるいは日本のメディアのすべては、「海」という言葉をタブーにしていた。

東北の被災者たちから聞いた体験談のなかで、最も戦慄的だったのは、大津波の第一波が襲ってきた後、一人の老人が瓦礫の下で東北民謡をうたっていた、という証言だった。その老人には第二波、第三波の津波が当然その後襲ってくることがわかっていただろうし、死ぬことを予測したなかでの唄である。

東日本大震災の一年前、二〇一〇年一月のハイチ大地震でも、被災者たちは瓦礫のなかで唄をうたっていた（ダニー・ラフェリエール『ハイチ震災日誌』）。かつてホメロスは『オデュッセイア』のなかでこう言った。「神々は来るべき世代が何か歌うことを持てるように、人間たちに不幸を用意する」。このことから、詩と「うた」について考えたい。

春季大会研究発表

第一会場（五二五教室）

個人発表

北村透谷における歴史観の問題

陳　璐

若い頃自由民権運動に参加し、その後文学の世界に移った北村透谷は、一般に文学家・詩人として見なされる。また、キリスト教入信も加え、従来の先行研究は、政治、文学、宗教という三つのジャンルにおいて、北村透谷の様々な側面を捉えてきた。だが「吾人は公平に歴史を研究せんとするものなり」（『明治文学管見』）と自らの創作事業を歴史の研究と結びつけたように、その歴史観もまた北村透谷思想の基底の一つとして検討しなければならない対象であるにもかかわらず、それを巡る研究にはこれまでほとんど手が付けられていない。

本研究は、今まで埋もれていた北村透谷の歴史観の問題に着目し、その特性を明らかにし、またそれを踏まえてどのような文学的実践を行ったかについて論じることを目的とする。この問題を探る際、まず同時代に思想的に北村透谷と関わった福沢諭吉、山路愛山、徳富蘇峰らを対照的に見ながら、次の三つの点を手掛りにして検討を行いたい。第一に、明治維新の代弁者である福沢諭吉を「純然たる時代の驕兒」（同前書）と批判し、さらに明治維新を「革命にあらず、移動なり」（『漫罵』）と真の歴史的改革として認めなかった透谷は、歴史に対してどのような認識を持っていたのか。第二に、山路愛山との人生相渉論争において、透谷はいかなる思想と歴史観に基づいて愛山の〈史論〉に反論を行ったのか。第三に、キリスト教を通じて北村透谷と近い考えを持っていたはずの徳富蘇峰は日清戦争直前に「大日本膨張論」を発表することになるが、蘇峰の歴史観と民権思想を擁護し続ける北村透谷の歴史観はどのように違うのか。

以上の点を手掛かりとし、同時代における北村透谷の歴史観の特性を示した上で、「真正の歴史の目的は、人間の精神を研究するにあるべし」（『明治文学管見』）と自ら語った透谷が、文学創作や詩人の立場で如何にしてそれを実践してきたかも検討する。

大正一五年と中国
――雑誌『改造』「現代支那號」が示す方向――

栗﨑愛子

大正一五年七月、雑誌『改造』は夏期増刊号として「現代支那號」を刊行する。この特集号には、のちに日中戦争の中で日本の行く末を予測した胡適、芥川の『支那游記』のなかでもその名が記され、共産党結成時の主要メンバーとなる李人傑、戊戌の政変で日本へ亡命した経歴をもつ徐啓超をはじめとする政治史に残る人物の名が並ぶ。また、郭沫若や田漢、徐志摩等の文学者の名も見える。しかし、日本近代を代表する雑誌の一つである『改

造』を発表と交流の場としながら、その後の政治のうねりの中で、これらの中国の知識人たちとの関係は途絶え、この試みは最初で最後となる。

そこで、中国知識人とのコネクションをかろうじて持ち得たといえるこの大正一五年という年に着目すると同時に、中国への関心を寄せ続けた山本実彦をはじめとする『改造』編集者たちが、日中の知的交流に一石を投じようとした「現代支那號」の意義を考えたい。日本の中国への歪んだ優越感と侵略的傾向が濃くなっていく時代のなかで掲げたこのテーマに対し、編集者は「我日本の雑誌で現代支那の思想文芸が総合づけられたことは、たしかに東洋誌界の一記録をなしたものである」と自負し、今後の日中の知的交流の展開に意気込んでいた。一から中国知識人たちとの関係を築き、政治・経済・文学にいたる総合的な角度で記事を集め、公平かつ客観的に対中関係を考えようとする姿勢が見える。これらの記事を日本へ紹介し、世界情勢の中の日中関係に対する考慮を呼びかけ、文壇、論壇の場の礎を作りあげようとしていた。同時に、日本がいかに中国との関係が希薄であったかが、中国語の翻訳に対する試行錯誤や、中国においては著名な知識人たちの、集合写真つきの紹介文からうかがえる。本発表では、これらの中国人著者や記事の紹介を通し、また他号の中国関連記事との比較から『改造』「現代支那號」の意義を検討する。

夏丏尊による日本の文学論の受容
――厨川白村『苦悶の象徴』と夏目漱石『文学論』を視野に入れて――

顔　淑　蘭

一九二〇、三〇年代の中国文壇で活躍していた翻訳者夏丏尊（Xia Mianzun, 一八八六－一九四六）の『文芸論ＡＢＣ』（一九二八・九）は、厨川白村『苦悶の象徴』（改造社、一九二四・二）と夏目漱石『文学論』（一九〇七・五）など、日本の文学論から大きな影響を受けて書かれたものである。

一方、厨川白村の『苦悶の象徴』からも漱石の『文学論』に似たような論述が散見される。東京帝国大学英文学科に在学していた頃、厨川白村は一時期漱石と師弟関係にあり、漱石が亡くなるまで二人の間に親交があったと言う（李強『厨川白村文芸思想研究』昆侖出版社、二〇〇八・三）。そのことから、『苦悶の象徴』に対する『文学論』の影響も考えられるように思われる。

『文芸論ＡＢＣ』において、文学における「情緒的要素」の強調、「科学の真」とは異なる「文芸上の真」の追求、そして、文芸の鑑賞を共鳴的創作とする観点などは、いずれも漱石と厨川から受け継がれたものだと言える。一方、夏丏尊はあくまで中国文学を外国文学の下位に位置づけ、前者の批判と後者の輸入を主張していた。また、作品の筋だけを追い、作中人物に同情する、あるいは表現などの形式的な面だけで作品を賞玩するといった文学作品の鑑賞法に対する批判を、事件性に重きを置かない自然主義作品の推奨や中国古典の詩と詞に対する批判に繋げていくところからも、夏丏尊と当時の中国文壇が抱えている問題を見ることが出来る。

本発表は『文芸論ＡＢＣ』、『苦悶の象徴』、『文学論』を比較し、『苦悶の象徴』と『文学

論』との関わり、また『文芸論ＡＢＣ』ひいては当時の中国文壇における前二者の受容の問題を考察していく。そのことによって、夏丏尊は日本の文学論から何を吸収し、何を捨象したのか、またそれが当時の中国文壇でどのような広がりを見せていたのかなどの問題を考えていきたい。

在満朝鮮人のモダニズム詩におけるモチーフ
――その受容と解釈の可能性をめぐって――

金　晶晶

本発表では「満洲国」で発刊されていた『満鮮日報』という新聞における朝鮮人のモダニズム詩を主に取扱い、それらの詩によく登場するいくつかのモチーフの由来を明らかにし、そこから在満朝鮮人のモダニズム詩を解釈しなおすことを目的とする。

『満鮮日報』とは、一九三七年から終戦まで「満洲国」の首都であった新京で発刊された日本の国策新聞であり、「満洲」で唯一の朝鮮語新聞であった。同時代の朝鮮では有名な新聞が次々と廃刊に追いやられ、作家が自由に作品を発表することができないほど日本による言論弾圧は厳しかったが、『満鮮日報』には異例として文芸欄が存在し、それが朝鮮から渡ってきた文学者たちに限られた作品の発表舞台を提供していた。『満鮮日報』の文芸欄はさまざまな文芸関連記事や小説、詩など多彩な内容で彩られていたが、そこに日本や朝鮮ではすでに流行が過ぎ去ったモダニズム詩が度々掲載されていたことは大変目を引くものである。そして一九四〇年八月二三日の新聞において、そのようなモダニズム詩を書く詩人たちは自らを「詩現実同人」と称して、『満鮮日報』に「「詩現実」同人集」という名前で詩を一日一編ずつ、六回にわたって連載している。それらの詩は概して独特な比喩表現が多用され、前後関係が簡単にはつかめないような難解な内容となっている。特に「詩現実同人」たちがよく用いていた花や動物、あるいは色のモチーフが詩に混在していることがモダニズム詩の解釈をより難しくしていると思われる。

そこで本発表では、在満朝鮮人のモダニズム詩によく登場するモチーフが当時「満洲」でも広まっていたキリスト教や昭和初期の日本のモダニズム詩から影響を受けていると思われることについて論証し、それらのモチーフが在満朝鮮人の詩においてはどのような意味や効果を生むのかについて考察したい。

パネル発表

近代天皇制と文学

山田俊治・宗像和重・林　淑美
谷川恵一・中川成美

本パネルの標題における「近代天皇制」というのは、明治維新から自由民権運動との対抗を経て形成されていく〈近代国家〉の支配体制の中核としての装置を指す。近代天皇制装置は、一方で政治的な制度でありながら、他方で共同体秩序に基礎をおくという、異質

な原理を併せもつ。西欧の国家が法の支配のもとにあるのに比して、日本では、支配は道徳的・情緒的機能を含みこみ、それは人格としての〈天皇〉に収斂されつつ、日本の統治権を万世一系の天皇家が継承してきたとされる伝統性にも保証される。言い換えれば、近代化の進行と古代性への遡源という国民的統合に有効な二つの機能を併せもつ稀な政治制度として〈近代天皇制〉は創出され、それは人々にたいして政治制度の内面化ということを可能にした。この問題の考察に文学が求められる所以である。

〈近代天皇制〉の創出過程の契機には幾つかの指標がある。明治維新、自由民権運動、また大日本帝国憲法制定（明治二二）、教育勅語発布、国会開設（明治二三）、日清戦争（明治二七）など、しかし本パネルはこのことの直接の分析はおこなわない。また〈天皇制〉という用語を定着させることになった、昭和初期の天皇制権力の性格をめぐっての論争である「日本資本主義論争」にも直接触れない。しかし国民国家創出をめぐる問題への位置づけは、多かれ少なかれ浮上することになろう。

以下報告者別の概要を記す。山田俊治は、「近代天皇制の感性」として、帝国憲法発布期の天皇について福地源一郎の言説を対象として、できれば国学あたりまで遡って検討する。宗像和重は、「獨歩と天皇」として、日清戦争期「横須賀なるある海軍中佐」が語る「明治二十七年の天長節」を祝う軍艦内を描いて、「天皇陛下万歳！」をもって結ばれる短編「遺言」などによりながら、國木田獨歩のいわゆる「小民」観とのつながりなどを考察する。林淑美は、「天皇制と狂気」として、王権としての天皇制のもつ土俗性が内包する〈狂気〉と、日本ファシズムの精神構造や昭和初年代・十年代に流行した新宗教との関連を考察する。谷川恵一は、「小説の中の天皇――長田幹彦『天皇』三部作をめぐって」として、第二次世界大戦後に出た、幕末以降の天皇を主人公にしたものとして、おそらくもっとも初期のものであろうテクストを手がかりに小説と天皇との出会いがもたらした問題構成への展望を考察する。ディスカッサントとしての中川成美は、パネル全体を概括しながら、戦後の天皇制問題を考える。戦後曖昧に放置された天皇制がどのような形で文学表現を規制・朧化していくかが焦点になる。ジェンダーの問題では目に見えない男権社会のメタファーとしての天皇制の機能を論じながら、一九四六年元旦詔勅から笙野頼子あたりまでのことを考察する。

第二会場（五一三教室）

個人発表

中島敦『和歌（うた）でない歌（うた）』
――《我》を廻る歌――

加藤　彩

中島敦による短歌集『和歌（うた）でない歌（うた）』は、一九三七年頃から一九三八年初めにかけて、中島自身によって編集され冊子の状態にまとめられた七冊の短歌集のうちの一冊である。七冊の短歌集は、便宜上「歌稿」と総称されており、中島が勤めた女学校の学校誌『ゆかりの梅』（一九三八年三月）に「羌笛」と題して発表された十四首以外は、生前に発表さ

れることはなかった。

これまで「歌稿」は、中島による《戯れ》とされながらも、ほぼ同時期の一九三六年に初稿が成立したと考えられる散文作品「過去帳」二篇（「狼疾記」「かめれおん日記」）と共に、中島が散文作品を本格的に執筆し始める時期と習作期とを結ぶ上で意義を持つ作品として捉えられて来た。しかし、《おぞましい生の円環》とも言われる「過去帳」二篇と重なる内容を含みつつも、「歌稿」には、原本における毛筆の筆跡が物語るように、伸びやかで滑稽な世界が広がっている。

中でも、短歌集全体を一つながりの精神の《だうだう廻り》として捉えることが出来る『和歌でない歌』や、横浜における生活を歌い出した『霧・ワルツ・ぎんがみ』『Miscellany』において、中島は、変化する《我》や《不安》、目や耳に飛び込んで来る光景や音を、一首ごとに捉えて廻った上で、連作として意識的に構成しながら短歌集を編んでいることがわかる。

本発表では、その中から『和歌でない歌』を取り上げ、捉えようとしても捉え切れない《我》を、短歌の連作として多面的に捉えながら、一冊の短歌集としてまとめた中島の試みについて考察する。その試みは、複数の視点人物による語りで展開する長篇小説「北方行」が中断され、「私小説」的な散文作品「過去帳」二篇へと執筆が移行する時期に行われたものであり、同時に、中島が同時代の文壇における、長篇小説への志向や自意識に関する模索を強く意識する中で行われた試みであったと考えられる。

消滅する書簡（エクリチュール）

――新出資料（谷崎松子宛森村春子書簡）から見る谷崎潤一郎「A夫人の手紙」――

西野厚志

谷崎潤一郎の「A夫人の手紙」が掲載された『中央公論 文藝特集』第二号（一九五〇・一）の編集後記には「終戦後の第一作であるが、事情があつて今回初めて公表される異色ある作品」とある。これは当初『中央公論』（一九四六・八）に寄せられ、軍部の介入による「細雪」の連載中断など、言論弾圧に苦しんだ作家の再出発を告げるはずだった。しかし、作中時間を戦時下に設定して飛行訓練中の将校と地上で彼を見守る女性との交感を主題としたために、GHQ／SCAP下のCCD（民間検閲支隊）により軍国主義的（militaristic）だとして全文掲載禁止となったのである。

以上の経緯によって、同作は占領期検閲の実態を解明するための貴重な資料となった。『占領期雑誌資料大系 文学編』第二巻（二〇一〇、岩波書店）がプランゲ文庫収蔵の検閲済み校正刷を写真版で掲載、福岡大祐「〈敵〉の布置――潤一郎敗戦期テクスト群を照射する「A夫人の手紙」――」（『日本近代文学』第八四集、二〇一一・五）が背景を詳らかにしている。だが、それだけではない。作家自身の発言によれば同作は戦中に松子夫人へ宛てられた友人の書簡を題材に執筆されたもので（谷崎・伊藤整「谷崎文学の底流」『中央公論』一九五八・四）、作中には戦時中の言論統制についての情報も記されている。つまり、それは戦後検閲の資料であると同時に、

戦時下の言論状況を記録したドキュメントなのだ。

本発表では、これまで不明であった原資料（谷崎松子宛森村春子書簡三通）の内容を初めて明らかにする。書簡の内容と作品の記述を比較することで、谷崎が原資料に施した虚構化の効果が確認でき、原資料の同時代状況（戦中）と作品執筆の時間（戦後）が交差する様相が明らかとなるだろう。戦前・戦後の検閲制度についての研究を架橋するとともに、谷崎独自のプラトニズムの帰結を作品から読み取ることで「A夫人の手紙」を谷崎文学全体の中に位置づけることを試みたい。

暴き出される「疎開」・「疎開人」
――石川達三『暗い嘆きの谷』を中心に

李　承俊

本発表では、石川達三『暗い嘆きの谷』（『文学界』一九四九・三月号～七月号）に描かれている疎開の様相を分析し、その意味を小説の発表された時期に照らし合わせて考察する。

『暗い嘆きの谷』は、一九四五年二月頃から同年一一月頃までの、長野県芋井村（現長野市芋井地区）に疎開していた人々をめぐる物語である。この小説は、人員疎開の最も一般的な形態であった（大人の）縁故疎開と（子供の）学童集団疎開の両方が描かれており、疎開を扱った小説としては特異なものと言える。しかも、疎開に関する最も普遍的な物語として認識されがちな人員疎開だけを描くにとどまらず、その以前から強力に推進されていた工場疎開にまつわる逸話も挿入されている。戦時体制を維持するための国家政策として人員疎開が実施されていた裏には、軍需物資の円滑な調達に差し支えのないよう、人的資本を工場疎開地域に移動させ労働力を確保しようとした意図が潜んでいた。この点から考えると、小説の後記に「この作品はかなり記録にちかいもので、殊更な粉飾は施さなかった」と記されている部分の意味が一層明確化される。石川達三に関しては、時代と社会に対する関心によって支えられ誕生した作家という評価もあるが、そのような作家による社会批判の声としてこの小説も位置づけられる。なぜなら、『暗い嘆きの谷』は、タイトル通りの暗い雰囲気に包まれた、嘆きに満ちた谷間の村の姿を、告発・摘発しているような目線によって描き出しているからである。その姿とは、「疎開」・「疎開人」の有様である。

石川達三によって「記録」された「疎開」、「疎開人」とはどういうものであったか。本発表では、疎開に関する行政史料・当事者による証言や手記・メディア記事などの分析を下敷きに、石川達三の『暗い嘆きの谷』によって提起された「疎開」・「疎開人」問題の内容及びその意味の究明を試みる。

庄野潤三とチェーホフ
――「プールサイド小景」と「コーラスガール」を中心に

村手元樹

庄野潤三の文学、特に庄野が昭和二〇年代に手がけた「夫婦小説」とチェーホフの間には大きな関連性がある。昭和二二年、自らの小説のスタイルを探求する庄野は「チェーホフ・ノート」なるものをつけ、チェーホフを批評的に読み、実作のためのチェーホフ研究に没頭する。そのほぼ二年後「愛撫」でデビューし、さらに模索を続け、「プールサイド小景」に結実させる。

「プールサイド小景」に特に影響を与えたと思われるチェーホフ作品が、庄野が昔から愛好して止まなかった「コーラスガール」である。勤め先での夫の使い込みが発覚したことをきっかけに妻が浮気相手のコーラスガールのもとに乗り込んでくるという初期の短編小説である。この二作品を比較し、まず眼につくのはどちらも「勤め先の金の使い込みのモチーフ」が重要な役割を果たしていることである。両作品とも使途や浮気の有無をめぐって登場人物の解釈がすれ違い、何も解決しないままに終わる。しかし使い込みというシャッフルが隠れていた関係性をあぶり出し、価値観を転倒させる効果を上げている。また、「コーラスガール」には、すれ違い、あいまいな関係性、オープンエンディングなど今日指摘されるチェーホフの特徴が詰まっているが、そのような世界観を庄野は巧みに受容している。単なる反映ではなく「プールサイド小景」はその世界をさらに広げ、深めている。それが最も顕著なのは後半めまぐるしくなる妻の内部世界の想念の広がりとそれに伴う幸福観の相対化である。

庄野はチェーホフを「喜劇の作家」と言い切る。人間のおかしみや悲哀、明るさや淋しさを同時に感じ取る故に、その描く世界は明るく、淋しく、そして深いとチェーホフを捉える。そのことが「プールサイド小景」における、妻の明暗さまざまな断片的想念が「いま」生きている瞬間の豊饒さを描き出すことに生かされている。

パネル発表

少女たちの〈いま〉を問う
――一九八〇年代の少女小説とジェンダー

久美沙織・倉田容子・嵯峨景子
大橋崇行・久米依子

本パネルは、一九八〇年代における集英社文庫コバルト・シリーズ（現在の、集英社コバルト文庫）を中心とした少女小説を扱うものである。

この時期の少女小説は、非常に特異なものであった。明治期から昭和初期にかけて隆盛したかつての「少女小説」は、一九五〇年代末に登場した「ジュニア小説」へと形を変えていたが、一九七〇年代の少女漫画に圧倒され下火になっていた。それが、七〇年代後半以降、正本ノン、氷室冴子、田中雅美、久美沙織のいわゆる「コバルト四天王」をはじめ、新井素子、藤本ひとみ、唯川恵、山本文緒といった作家たちによって、空前のブームを巻

き起こしたのである。これらの作家の多くは、新人賞によって見いだされた若い書き手たちであり、読者と同じような価値観を持った等身大の少女たちを描き出したことに特徴づけられる。また、単なるブームにとどまらず、作家たちが一般文芸へと進出し、あるいは、吉本ばなな、小川洋子、川上弘美などの作家と接続することで、その後の〈文学〉作品も含めた日本の小説全体を大きく規定したものだと言える。

この分野についてはすでに、菅聡子編『〈少女小説〉ワンダーランド　明治から平成まで』（二〇〇八）や、久米依子『少女小説の生成　ジェンダー・ポリティクスの世紀』（二〇一三）などで言及され、長谷川啓・岩淵宏子・久米依子・菅聡子編『少女小説事典』（二〇一五）において基本的な事項がまとめられているが、まだ研究の前提となる大きな枠組みを論じる段階にあると言えるだろう。したがって本パネルでは、これらの先行研究を踏まえて個別のテクストを分析することを通じ、同時代の少女文化、青少年文化とそこにまつわるジェンダーの問題を考えるためにはどのような視角が有効なのか、それらが現代文化におけるどのような問題と接続しているのかについて、より具体的な議論を進めていくための方向性を探ることを目指すものである。

本パネルの冒頭では、久美沙織氏による講演を行う。氏の著作『コバルト風雲録』（二〇〇四）を踏まえて、当時の時代背景や作家たちをめぐる状況、当時の読者の問題などを、より具体的に振り返る。また、現役の作家として、一九九〇年代以降から現在までの小説をどのように捉えているのか、二〇一五年夏に刊行する新作の小説『レイラ　いちばんすきな海のいろ』で抱えている問題意識などをお話頂く予定である。

研究発表は、三名を予定している。まず、嵯峨景子は、「ジュニア小説」が衰退するなかで登場した新たな書き手たち、そのなかでも氷室冴子を中心に取り上げる。二〇一四年一二月の雑誌『ユリイカ』における特集「百合文化の現在」に寄せた論考「吉屋信子から氷室冴子へ――少女小説と「誇り」の系譜」を踏まえ、氷室の作品と彼女が戦略的に用いた「少女小説」という用語について、社会学の見地から考察をおこなう。

次に大橋崇行は、新井素子『あたしの中の……』（一九七七）、『星へ行く船』（一九八〇）を手がかりに、一人称によって語られた少女たちのあり方について分析を行う。特に漫画・アニメ文化との接続が強調されてきた従来の言説に対し、この時期の作家たちが小説、エッセイ、漫画、アニメーションをはじめとした多様なテクストを等価に扱おうとする方向性を持っていたことに注目し、そのような発想が読者との双方向的なやりとりの中でどのような表現を生み出していったのかについて考察する。

最後に倉田容子は、七〇年代から九〇年代の『小説ジュニア』『Cobalt』をクィア・スタディーズの視点から読み直す。九五年に『Coming OUT！』を出版し、『anise』創刊号で「レズビアンだってことは前提」として今後は「私自身の感覚」を音楽に綴ると語った笹野みちるは、八〇年代後半、「東京少年」として一人称を「僕」とする歌詞に思いを込めた。笹野の表現の変遷を思考の糸口とし、七〇年代後半以降の少女小説における〈女を愛する女〉の表象と、レズビアン・ミニコミ誌／商業誌との連続性を検証する。

以上の講演、発表を踏まえ、久米依子をディスカッサントとして迎えて、会場を交えて討議を行う。サブカルチャーの枠組みに止まらず、八〇年代から現代へと至る日本文化や文学、そこに横たわるジェンダーの問題へと、議論を広げていきたい。

第三会場（五二四教室）

個人発表

戦後台湾の日本語小説
――黄霊芝「蟹」再考――

下岡友加

黄霊芝（一九二八―本名：黄天驥）は日本統治下の台湾に生まれた作家である。日本の敗戦時まで日本語教育を受けた彼は、戦後も日本語を主たる創作言語としてきた。戦後の台湾では中国語の使用が義務づけられたが、国民政府の圧政下では命の危険さえ伴う日本語による創作を黄はあえて選択した。彼の文学営為は、「「日本」―「日本人」―「日本語」―「日本文学」という〈四位一体〉」（小森陽一『〈ゆらぎ〉の日本文学』日本放送出版協会、一九九八・九）の思考のなかに長く閉じられてきた「日本文学」という「制度」を相対化するものであろう。

黄は二〇〇四年、『台湾俳句歳時記』（言叢社、二〇〇三・四）により、第三回正岡子規俳句者賞を受賞するなど、日本では台北俳句会主宰（俳人）として知られている。但し、彼の単著『黄霊芝作品集』全二一巻には、俳句のほかに短歌、小説、随筆、評論、童話など幅広いジャンルに渡る創作が収められている。その一部は『岡山日報』『えとのす』『鱗光』など、日本の新聞・雑誌に掲載されているが、「日本文学」研究からのアプローチは殆どない。

本発表では、一九六二年の『群像』新人賞応募作品であり、黄の創作集の筆頭に掲げられている小説「蟹」（『黄霊芝作品集　巻一』一九七一・一。のち『岡山日報』一九七一・九～一〇掲載）を分析対象とし、黄の日本語文学の内実について具体的に明らかにしたい。「蟹」について、発表者は以前に一度論じたことがあるが、あらすじを中心に基本的な構造を指摘するにとどまった（「黄霊芝「蟹」論――人間の原始的な意義とは何か？――」『現代台湾研究』二〇一〇・三）。小林正明は「蟹」の構造を「立体的」「哲学的」と既に高く評価しているが（「黄霊芝「蟹」」『国文学解釈と教材の研究』二〇〇七・一〇）、今回の発表では、蟹や蜘蛛に託された象徴性や、都会を捨てて海へと回帰する老乞食の道行きの意味について改めて考察し、小説のより豊かな読みを探ることで、黄の日本語文学の特徴と可能性を追究したい。

伝達する身体／記憶する身体
——多和田葉子『献灯使』をめぐって

岩川　ありさ

一九八二年からドイツに住み、日本語とドイツ語のあいだに「詩的な峡谷」を見出しながら創作を続けている作家・多和田葉子は、東日本大震災と原子力発電所の事故後、「震災後文学」と呼ぶべき作品を多く発表している。「原発事故」を経て鎖国した日本の未来を描いた「不死の島」（初出『それでも三月は、また』講談社、二〇一二年）、人間が絶滅した後の世界を生きる動物たちが主人公の戯曲「動物たちのバベル」（初出『すばる』二〇一三年八月号）、老人たちが長く健康に生きるようになったのに対して、か弱く脆い身体を持つ子どもたちであふれた世界を描いた「献灯使」（初出『群像』、二〇一四年八月号）。これらのテクストを収めた『献灯使』（講談社、二〇一四年）は、刊行された時点で、「ディストピア文学」と評されたほど過酷な世界を舞台にしている。

本発表では、「献灯使」を対象として、登場人物である、「義郎」と「無名」という「曾祖父」と「曾孫」のかかわりを通して、「伝達する身体／記憶する身体」として他者が立ち現れる過程について考察し、傷つきやすさとそのケアという、近年の多和田文学の主題との関連について述べる。その際に、クィア理論、とりわけ、『戦争の枠組み』（清水晶子訳、筑摩書房、二〇一二年）などの著作で、「生のあやうさ」や「傷つきやすさ」の問題について論じているジュディス・バトラーの議論を参照しながら、「震災」の記憶が刻みこまれた「献灯使」というテクストを通じて、伝達しあい、他者を記憶する身体が、あやういバランスの上に成立している生をいかに生き延びるのか、そして、記憶を紡ぎ直すのか、その可能性について論じる。

ライトノベル雑誌からみる〈物語生産システム〉の具体相

山中　智省

アニメやマンガといったサブカルチャーに限らず、既存の文学ジャンルに対する影響も無視出来ないほどに発展を遂げた、若年層向けのエンターテインメント小説であるライトノベル。本発表は、その隆盛を支える〈物語生産システム〉について、ライトノベル雑誌を手掛かりにアプローチを試みる。

ここで言うライトノベル雑誌とは、富士見ファンタジア文庫や電撃文庫のような、ライトノベル専門レーベルとの結びつきを持った小説誌やムックを指す。主に専門レーベルの版元が定期刊行し、実誌面は小説作品のほか、マンガ作品やキャラクターイラスト、アニメ化をはじめとするメディアミックス情報、読者参加型の誌上企画や公募新人賞との連動企画といった多彩な内容で構成され、従来の小説誌とは趣を異にしている。刊行時期により性格の変動はあるものの、これまでライトノ

ベル雑誌はオフィシャルな情報発信・獲得の手段として、あるいはライトノベルの読者・作家・編集者が交差するコミュニケーションの場として独自の雑誌文化を築いてきた。また、作家の中にはかつてライトノベル雑誌の読者であった者もおり、同誌が作家の読書経験の一端を担いつつ、デビューへと至る経路になり得たことがうかがえる。すなわち、定期的に多種多様な作家・作品を輩出するライトノベルの〈物語生産システム〉において、ライトノベル雑誌はそのシステムを構築・稼働させる原動力の一つであった可能性が高く、現代の活字メディアを考える際にも注目すべき資料体だと言えよう。しかし、先行研究の多くは創廃刊状況や簡略的な内容紹介の記述に止まっており、未だ実態の詳細な把握には至っていない。

本発表では、富士見書房が刊行する「ドラゴンマガジン」（一九八八年創刊）の事例から〈物語生産システム〉に関わる具体相を報告すると同時に、ライトノベルという文化現象の総体における、ライトノベル雑誌の位置づけについても再検討していきたい。